

頃の近松は多くは、病床に親しんでゐた。一年に三四種或は五種の作を年々發表してゐる近松がこの終焉の前の享保八年は殆ど執筆を絶つてゐて翌九年に漸やく此作を書いてゐるほどだから、少し病ひは快復はしてゐたといふものゝ、かういふ心痛の種を蒔かれては、大打撃を蒙らざるを得ない。さうして『關八州繫馬』といふ名作は遂に近松の絶筆と爲り、時代物中屈指の名作でありながら『火を呼ぶ』といふ因縁に崇られて、とう／＼劇壇から封じ込められるといふ飛んだ厄難に出逢つてしまつた。

## 竹田出雲と周圍の人々

### 忠臣藏初興行の騒ぎ



竹田出雲の像

近松門左衛門逝き、竹本播磨少掾歿後の淨瑠璃界は、當然の歸趨でもつて、その實權が、作者としての奇才興行主としての辣腕家たる、竹田出雲の手に移つて、義太夫節は暫く太夫を離れ、従つてすこしづゝ其容を變へて行くのは是非もないことであつた。すでに十五歳にして竹本座の座主であつた（父竹田近江の後見はあつたにせよ）出雲は長ずるに従つて十二分の經驗に加ふるに、殆んど天才的の手腕をもつて縦横に活躍したのである。さうして道頓堀の黄金時代、古今無比の最盛期を現出したと傳へられる。

延享版の『淨るり譜』は

此頃操り流行して歌舞伎は無きが如し、芝居表は數百本の幟、進物等數を知らず、東豊竹、西竹本、と相撲の如く東西に別れ、町中近國ヒイキをなし、操りの繁昌言はん方なし。

と云ひ、又寶曆版の『竹豊故事』には

操り繁昌し東は西に負けじ、西は東に勝たんご互ひに勵み出來、益々芝居繁昌し、淨瑠璃の作者種々様々の趣向をあみ出し、道具立衣裳に金銀を措します、美麗を盡し、町中の若い衆、豊竹講、竹本講と號し、毎月掛け錢を集め置き、替り淨瑠璃の節進物の入用に仕玉ふさみや、儲々奇特千萬なる心中益々信仰なさるべし。

と云つてゐるところをもつて、略ぼその盛觀を察することが出来る。されば淨瑠璃界に一轉機を起した傑物出雲の作物を通じてその興行ぶりを見てみよう。作者としての出雲は近松在世のころ、享保八年二月、三十三歳の時、松田和吉との合作で『大塔宮囃鏡』を書き、近松の添削を乞ふて、その處女作を發表し、その二度目には(同年十一月)『櫻町名花昔』といふ世話物を書いたが、これは失敗に終つて發表をしなかつたばかりか、後眞世話物は書かぬと決心をしたとの事である。さうしてゐるうちに近松が死んだが爲に、いよいよ彼は筆を揮はねばならぬ時機に達し、享保十年九月には『大内裏大友眞鳥』の傑作を發表して大好評を取り、眞鳥の本と鼠の糞は何處の家にもあると云はれる程に、一時に文名が高まつた。ましてや敵方である東の芝居の豊竹座の作者、紀海音が享保八年七月『傾城無間鐘』を終りとして引退してしまつたので、彼の時代が到來したわけである。すでに現今著名なる、

『忠臣藏』『千本櫻』『菅原』『双蝶々』『平假名盛衰記』『小野道風』『凱陣紅葉』(大塔宮)(以上合作)『大友眞鳥』『五鴈金』『菅屋道満』(以上單獨作)の十二編を始めその他二十二編

の作を見ても解る通り、從來の近松時代の淨瑠璃本位に比して舞臺は著るしく人形本位に傾いて來て即ち歌舞伎化されて來たのである。云ひ換へれば少數が聽いて味ふ藝術が、目に訴へて大衆を迎ふる藝術に變化して來たのである。いふまでもなく興行主であつて作者を兼ねた彼れが當然の執るべき道であつたのである。而かもその傾向は夥しい社會の反響を受けたので。出雲の技能は人形遣ひ吉田文三郎の卓拔な技倆と相俟つて、新しい形式をどしどしと試み、觀客をして應接に違なからしめてゐる。さうして人形界と歌舞伎界の双方へ向けて多くの貢獻を遺すことの出來たのは偉とせねばならない。その新形式の重なる一部を記してみる。

●國性爺の引道具を工夫する、九仙山の景事、千里の籤、樓門、など支那を想像せしめる珍奇の趣向……正徳五年十一月。

●曾我會稽山十場を一晝夜に仕組み、舞臺の上部に(砂時計の發明者である父近江讓りの)大時計を掲げて、時を打たす……享保三年七月。

●人形舞臺を重要視して、從來正面に在つた太夫の床を左遷して、舞臺全部を提供していよいよ大道具大仕掛け人形活躍の便宜を謀る時に加賀國篠原合戦上演……享保十三年五月。

●人形の指先動く仕掛けにする。『車返合戦櫻』の大森彦七……享保十八年四月。

●從來は突込みと稱して兩手で人形を差上げて遣つてゐた式を改めて三人遣ひとする。『菅屋道満大内鑑』の與勘平、彌勘平の腹ふくらし……享保十九年十月。

- 人形の眉動く仕掛けにする。『赤松圓心縁陣幕』本間入道の眉……元文元年二月。
  - 寫實式の舞臺。『夏祭浪花鑑』本水本泥を用ふる試み、帷子を人形に着せる……延享二年七月。
  - 人形の耳動く仕掛けにする。『義經千本櫻』忠信狐……延享四年十一月。
  - 能囃子を用ふ。『戀女房染分手綱』五ツ目。道成寺の所作……寶曆元年二月。
- 以上大要。

出雲が生涯の大事件として、人形が如何に重要視せられたかといふ一例證として、果また藝界の一佳話として、而かもそれがお馴染の『假名手本忠臣藏』の初興行にからまる大騒ぎだったのだから、悉しく説く必要がある。竹田出雲、三好松洛、並木千柳が京都の歌舞伎中村宗十郎座の『大矢數四十七本』といふ義士の芝居を見て、すぐ三人が合作で書き上げた『假名手本忠臣藏』が竹本座に上演されたのは、寛延元年八月十四日からのことだった。その忠臣藏があらゆる澤山の義士復仇の芝居を出し抜いて百八十餘年を経た現今まで、いまだに歌舞伎や淨瑠璃の獨參湯と稱されて上演せられてゐるほどだから、書卸のその當時の人氣も推して知るべしである、これは開場して程經ぬ或る日のこと、こゝにゆくりなくも一騒ぎが持ち上つて來た。人形の頭領吉田文三郎はいふまでもなく由良之助の人形を遣つてゐた、その文三郎が九段目の山科を語つてゐる太夫の頭領竹本此太夫（後に竹本筑前少掾）の部屋へぬつと現はれて來て、先達てから申し入れたく思ひ居しが、ついで差控へ、言ひおくれたれど、打ち明けて申し談じたき儀あり……。

とかういふ前置きで、舞臺上の相談にやつて來た。その相談といふのは、山科の場で由良之助が本藏に向つて本心を明かし、師直郎に忍び入り用心の兩戸を外づす考案を實地に示す條『仕様をこゝに見せ申さんと庭に……』といふ語り場を、今少し間を伸して語つて貰ひたい、伸して貰はないと庭に下りて駒下駄を履き竹籤の傍まで行く間の動作がどうも窮屈でいけない、思入れも充分に出來ずどうも遣ひ苦しいから……。

とまあ頼み込む體裁で喋つたと思はれる。

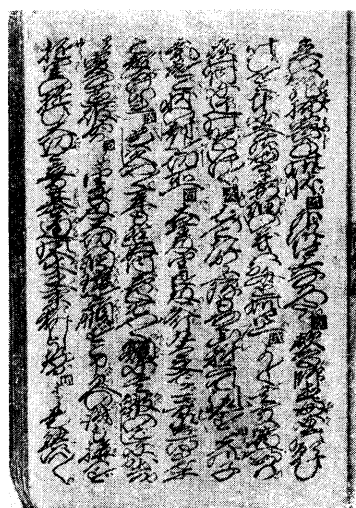
ところがこの相談に對して、此太夫は、もう今までに日數も可なり打續けて來てゐる、いまさら節や地合を變更することは出來ない元來かういふことは初日に語り定めた上はどうにもなるものではない、初日同然幾日経ても語り口に狂ひの無いのが私の生命なのだから、それをうか／＼と變更するやうなことがあつては第一私の信用に關はる、だから残念ながら此御相談には應じ兼ねる。と判然と突きはなした。かう云はれると、文三郎とて一旦云ひ出した言葉の上黙つてそのまゝ引つ込んでしまふ譯には行かない。そればかりか實

際この庭に、の條には思ひあぐんだのだから思案の變へやうがない、だからもう一度強く、而かもすこし皮肉を交せて、さう貴君は云はれるだらうと思つた、私も今日まで貴君の方から此ことを注意してくれるだらうと思つて實は心待ちに待つてゐたのだ、元來槽下の責任者として名ある此太夫ともあらうものが『此場合定めし人形は遣ひ難くからう』といふ察しがつかないとは……。とすこし喧嘩腰だつたから憎まれ口を利いた。此太夫とて藝術上のことで一旦吐いた自説は平生の信條に對しても急に枉げるわけには行かないのである。改めろ、改めない、といふ押問答で、結局互ひに血相を變へて云ひ争ふたが、どうにも解決がつかない。このことを聞きつけて座主の出雲と二代目の政太夫、三味線の友二郎等が仲に飛んで入つて、とりあへず、まあ／＼と二人を無理に靜めて、懇々と双方の云ひ分を聽いて見たが、どちらも頑として主張を枉げやうとはしない。それで餘儀なく双方を其夜は無事に自宅へ送り歸へしたが、サテ困つたのは出雲である。どちら一方が折れてくれなければ明日の芝居を開けることが出来ない、さうしてどちらの主張にも道理があるのだからちよつと厄介だ。

そこで出雲はその善後策を協議する爲めに一座の重なる關係者を、閉場後の樂屋に召集して、所謂秘密會議を開いた、かういふ會議といふものは、いつの場合でも同じやうに、喧々囂々として、なか／＼とまよりのつかないものであることは誰れにも經驗のあること、凡そは想像出来るが、結局は座長たる出雲の言葉の一點が議場に於ける濃厚な空氣をつくり上げてやがて歸着點を見出すことになる。大半は賛成々々といふやうな手を揚げて會議は數時間を費して終局となる段どりである。その所謂多數決によつて決せられたところでは、文三郎は當時竹本座を背負つて立つ唯一の人氣者、ことに今度の人形は宗十郎以上の至藝で神業とまで稱讚されてゐるから、此太夫といふ名人を失ふのも惜しいには惜しいが、どうも文三郎を失つては竹本座全體の損失が多きい、だからもう一度此太夫に讓歩を勸告して、萬一承知をしない場合は休場をさせるより致し方がない。此決議案は早速此太夫の方へ通知されたが、這がは此太夫だ、すぐに休場を快諾して、已れの藝の自信を重んじて竹本座槽下の名譽を古下駄を捨てやうに捨て、しまつた、これでこの問題は先づ解決したが、あとの問題は此太夫に代つて九段目を受持つ太夫を選定せなければならぬことである。これも可なり大問題だ。出雲は頭を悩ました、ふと立派な候補者が思ひ當つた。それは竹本座の創立にもつとも縁故の深い故内匠理太夫の實子、豊竹上野少掾である出雲は早速駆けつけて、情理を盡して竹本座の浮沈に關する大事の場合、是非出場を承諾して貰ひたいと懇願した。上野少掾も出雲の熱誠に動かされて半は承諾をしたが、その前に一應此太夫と會見をしたいと云つた。そこで早速此太夫に通じて、日本橋一丁目の出雲の宅で三人は會見した。上野少掾は此太夫に向つて竹本座引繼ぎの挨拶を述べた、此太夫も快よくこれに答へ、さうしてお互ひに九段

目の作意やら語り口など藝術談をして恰も百年の知己の感があり、好都合に運ばれて行き、どうやら無事に済んだ。出雲はほつと吐息をついたのである。これだけの波瀾重疊が、たつた一夜の中に出雲の努力で収まつたのである。かうして竹本座は幸ひに休場をせずして打ち続けることが出来、これが間もなく市中の評判となつて一層の好人氣、上野少掾は竹本大隅掾と改名して、これも甚だ好評、興行日數の積む程に益々人氣は騰るばかりである。何が幸ひになるかわからないものだ。さてこの問題に關聯して大隅掾の人格を物語るべき美しい例證がある。

大隅掾は此太夫に代つて九段目と七つ目の掛合ひの由良之助を勤めるのだが、竹本座で用意をして置いた出版用院本の原稿を見ると



忠臣九本七ツ目掛合

七つ目掛合ひの由良之助は因とあつてちやんと大隅の名に代へられてゐる。これを見た大隅は斷じてこれを拒んで、かう云つた。自分は途中代り役として勤めてゐるのである院本は末代まで残る大切の記念だから、譬へ此座を退座して行つても、當然此太夫の名義を用ひなければならぬ。とかういふ理由で急に因の字を削らせて因の字に改めさせた。謙讓の人で無くては出来ない業である。現存七つ目の院本由良之助役に因の一字が入つてゐるのは、かうした美談がたつた一字に含まれて斯道の人々に何かの暗示を與へてゐる。

さうして一方此座を退いて行つた竹本此太夫はどうなつたかといふと、これは人々の勧めにまかして、島太夫、百合太夫などを率ゐて、東の芝居豊竹座に轉じて櫓下に据はつたが、これも飽くまで善意で酬ひて、わざ／＼竹本座の『忠臣藏』の終るのを待つて、同年十一月十四日初日で『攝州渡邊橋供養』を上演してゐる。ところが此方も脱退一件や何かで市中の噂となつてゐるだけに、意外な人氣が集まつて翌年の三月まで五ヶ月に亘る大入滿員といふ芽出度さである。かういふ次第で、興行界はいつも空氣を新鮮にする爲めに入れ替へをしなければいけない、といふ先例が作られて、その後の兩座へは、時々太夫の入れ替へが行はれてゐる。この東西兩座の出方が混亂すると云ふ事は此時が始めて、古來の一座固定式が自ら打破された譯である。

二百年の後までも、絶え間なく、多くの見物を騒がして來た『假名手本忠臣藏』は、先づ初興行からして、かうした大きな興行主兼作者太夫、人形を騒がしたのだつた。此時、出雲五十八歳、此太夫四十九歳、大隅四十七歳、文三郎も五十歳前後であつた。

出雲の略歴を摘記する。

元祿四年大阪に生る。(江戸説もある)

寶曆六年十一月四日歿す。(行年六十六歳)

幼名三四郎。後清定。號千前軒(千日寺の前の意、住宅から名付く)。定紋、竹の丸に九枚笹。立慶町、吉右衛門町(清津橋より戎橋までの間)兩町の年寄役を勤む。

墓地、生玉寺町青蓮寺。法名、文明院岑松立顯居士。

門人、小出雲、吉田冠子(文三郎)竹田正藏(爲永太郎兵衛)竹田外記、竹田瀧彦。竹本三郎兵衛。竹田因幡。竹田和泉。竹田平七。竹田伊豆。竹田土丸。二步堂。松田和吉。その他。

竹田出雲の股肱となつて其大業を援け、此太夫と覇を争つて自ら重きを爲した吉田文三郎は、一面吉田冠子の名を以て之れ又淨瑠璃の作をのこしてゐるところを見ると、精力家であると同時に、よほど卓抜の技倆をもつてゐる人には違ひない。人形藝術の上に文三郎の發案として現にそのまゝを踏襲してゐる幾つかの例を擧げることが出来るが、床の淨瑠璃が歌舞伎式になると同じやうに文三郎の人形も當時としては随分寫實風になつて來たのであらう、その爲め人形の世界に新しい境地がづん／＼見出されて行つたのである、たしかに名匠には違ひなかつた『夏祭浪花鑑』で始めて人形に帷子を着せ、(お辰の扮装、桔梗の帷子、黒締子の前帯、淺黄綿帽子。)後世にその型を傳へた如き。或は『義經千本櫻』の道行で狐忠信の耳を動かし、黒地に縫金の源氏車の模様を考案し。また『忠臣藏』の由良之助に二つ巴を付けた。そんな例は擧げればきりが無いほどである。

文三郎の人形には人間の魂が躍動してゐると傳へ、それが一つの怪談噺になつ



吉田文三郎の像

てのこつてもゐる。おなじみの五大力の狂言のその元の菊野殺しの芝居についてである。『薩摩歌妓鑑』といふのが本題である。(近松平二や吉田冠子即ち文三郎等の合作) 主人公の早田八右衛門が、嫉妬に燃えて、血刀を掲げながら、四邊を探し廻る途端、すでに殺されてゐた藝妓菊野の死骸の疵口へ片足を踏み込み、爪先に腸を引かけてひき上る科がある。これは文三郎の型であるが、如何にも寫で實眞に迫つてゐて凄慘の氣を咬りそうな場面である歌舞伎の方などでも後年この狂言を『初嵐元文嘶』と改題して、道頓堀で柴崎林左衛門が勤めたが、この時すつかり此文三郎の型を用ひたところが、こゝは人形でなく、實際の人間が演ずるのだから、あまり慘酷で見てゐられない、といふので評判がよくなかつた。晝間文三郎によつて魂を吹き込まれた八右衛門の人形が、夜になつて、人靜まつた時、一人で、文三郎に使はれてゐる通りをくりかへし、時には結び上げた髪を振り亂して大荒れに荒れ狂ふ。朝になつて樂屋へ入つたものは此容子を見て膽をつぶして驚く。又或時は肌脱ぎになつて大刀を抜いたまゝ、さも勞れ果てたやうになつて樂屋の入口に仆れてゐる。或る小屋番は彼の人形が一人で闇をさぐりながら歩いて行くので、後をつけて行くと、流し場へ下りて水甕に首を突つ込んで舌鼓を打つて水を貪り飲んだ。かういふ風にその當時のことが、さも實際に見て來たやうに傳へられてゐるが、眞偽はどうでもよい、文三郎の人形が如何に如實に人間そのまゝの動作をもつて見物に迫つて來たかといふことが想像出來ればよい。

明治になつてから、七年の三月、松嶋文樂座でも、やはり同じやうに興業し、ひきつゞいて行つてゐることを思ふと、可なり受けたのらしい。『五雁金、安治川橋』『加賀見山、鶴ヶ岡』『桂川、六角堂帶屋』『松嶋草紙廓賑だんまり』『妹背山御殿』。春太夫(お半)團平(尾上)玉造(花園姫)任太夫(半齋)染太夫(長右衛門)彌太夫(丁稚長吉、松嶋傳吉)重太夫(儀兵衛)松花(お初)勝七(おみわ)寛治(權姫)松嶋草紙のだんまりは附近の松嶋遊廓の當て込みであつたらうが、此狂言には春、重、染、住、彌、浪、團半、松花、寛治、勝七、玉造、玉助、辰造など惣出で、盲目の住太夫の花魁が杖をつけて出るやら、彌太夫が百日髪を忘れて散切頭で飛び出したり、飛んだ餘興氣分を發揮した。